

ロンドンという多面的身体 —*The Strange Case of Dr Jekyll and Mr Hyde* を読み直す

武田美保子

1 はじめに

切り裂きジャック殺人事件が人々を震撼させた頃のロンドンがどのようなものであったかについては、その2年前に出版された Robert Louis Stevenson (1850-94) の *The Strange Case of Dr Jekyll and Mr Hyde* (1886) が、当時の雰囲気伝えてくれるに違いない。ステューヴンソンのこの小説は、後期ヴィクトリア朝のロンドンが持つ危険な猥雑さを描き出すテキストとしてきわめて興味深い。そこでは、切り裂きジャックさながら、紳士と殺人鬼の両方の顔を併せ持ったひとりの人物に潜む人格の二重性が、時にロンドンの持つ二重性と呼応し合いながら、たちこめる霧の中で交錯する。Peter Ackroyd が指摘するように、この小説においては「変化する自己同一性と秘密の生活の物語は、都市の『実態のない変わりゆく霧』を介在させた中で起こる」(Ackroyd 435) のである。さらにまたロンドンの表象は、主人公を取り巻く階級や人種や性などの問題とも幾重にからみあっているため、富裕なウエスト・エンドと貧困のイースト・エンドといった固定的かつ単一的な二項対立に還元することはできない。Judith R. Walkowitz も、ステューヴンソンや、Henry James、George Gissing といった後期ヴィクトリア朝作家によるロンドンの表象について言及する際に、彼らのうちのある者は、この都市の西と東という対立をめぐる階層的区分を強固にしてしまったが、ある者はこうした二項対立的なイメージを退け、さらにそのうちのある者は、この都市の「容易に

解読できない、分断化され、不統一で、ばらばらの社会的世界を際立たせた」(Walkowitz 17) と言っているが、スティーヴンスン自身は、先に述べたように、まさしく後者に属する作家だといっているだろう。しかもそのロンドンには、二重性に依拠しながらそうした二項対立的図式を打ち崩すことにより、刻一刻とその姿を変える多面的な記号性を備えるだけでなく、喧騒の中で時に独自の声を発することもある、おぞましくも魅力的な身体として呈示されるのである。

それゆえ本論文では、スティーヴンスンの『ジキル博士とハイド氏』におけるロンドンの持つ記号性の分析を通して、この都市がいかにか階級や性などの問題における階層的な位相を内包しながら、二項対立には還元し得ない多面的な身体として表象されているかを明らかにしていくことにしたい。論を進めていく過程では、この小説を基に書かれた Emma Tennant の翻案小説、*Two Women of London* (1989) にも言及することになるだろう。

2 屋敷と都市のトポロジー

『ジキル博士とハイド氏』は、二重性の記号に満ちたテキストである。その二重性は、まず表題の2つの人物の中に、善と悪の姿をまとめて顕現する。しかしながら留意しておきたいのは、この小説において、ジキル博士とハイド氏の二つの人格は、実際には善と悪とに明確に区分することができないということである。高潔な慈善家で高名な医師である、「医学博士、民法学博士、法学博士、王立協会院、等々のヘンリー・ジキル (Henry Jekyll, MD, DC, LLD, FRS, &c.)」は、薬品の力を借りて残忍な Mr Hyde になり、凶悪な犯罪行為を行うのだが、ハイド氏の人格は薬の作用で突然発生するわけではない。若い頃から高邁な理想を掲げ、己を律して励むことで名声を確立した博士ではあったが、その手記にあるように、もともと享乐的な性癖を持ち、その属性を十分に「抑圧」することができないでいた。そのため、彼の「苦悶する意識の胎内」では、「両極端の双生児がたえず争って」(56)、次第に二

重生活の深みにはまってしまう。つねづね自身の中で相争う二つの人格のおのおのを切り離し、これまで悪として抑圧してきた人格にも形を与えるべきだと考えていた博士は、薬を調合することでそれに成功するのである。つまり、「魂の劣悪な要素のあらわれ」である「第二の形体と容貌」も第一のそれに劣らず、「生来のもの」(57)であるので、表面的には善であるジキル博士の性格は、善と悪、知的なものと動物的なものとの混合から成り、一方そこから切り離されたハイド氏の性格は純然たる悪から成るのだといえよう。

このように、博士の持つ二重の属性が、単純に善と悪に振り分けられないように、両者の居住空間をめぐる地形学的な位相も、決して単純な二項対立には還元しえない。まず最初に読者の視線が寄せられるのは、博士の顧問弁護士である Mr Utterson の日々の散歩相手 Mr Richard Enfield が目撃した、ハイド氏が入り出す家の周辺の模様である。

There is no other door, and nobody goes in or out of that one but, once in a great while, the gentleman of my adventure. There are three windows looking on the court on the first floor; none below; the windows are always shut but they're clean. And then there is a chimney which is generally smoking; so somebody must live there. And yet it's not so sure; for the buildings are so packed together about that court, that it's hard to say where one ends and another begins. (9)

この一角は、彼がたまたま遭遇した珍事件の張本人ハイド氏以外は入り出すのを見たことがないあやしげな場所で、窓はつねに閉じられ、「中庭のあたりは家が建て込んでいるため」、「家と家との区切りがはっきりしていない」。しかしながら、ハイド氏がジキル博士の遺言上の相続人であることを知るアタスン氏は、ハイド氏が入っていった家が、表通りのジキル博士の邸と中でつながっていることを知っている。その裏口は博士の実験室とも解剖室とも呼ばれる建物になっているのだが、その裏通りの角をまがると堂々と

した家並みが続く表通りの一角に出て、そのひとつが博士の邸の正面となっている。周辺の住居は大分荒れ果てて、今は雑多な職業の人々の住まいとなっているものの、博士の邸の戸口は、「裕福で、安楽な気配を」（16）たたえていた。このようにひとつの邸は、堂々とした表の顔と騒然とした裏の顔という二つの顔を見せながら中でひとつにつながっており、こうした邸の位相は、ジキル博士とハイド氏というひとりの人物の二つの相貌に対応しているかのようでもある。

「青白い小男」で「どことって畸形（malformation）なところがないのに、出来そこないの印象を与える」（16）と描写されるこのハイド氏だが、¹ その彼の居住もまた彼の属性にふさわしく、イースト・エンドのソーホーにある。² Sir Danvers Carew 殺人事件の翌朝、アタスン氏が警官たちをハイド氏の家に案内した際のロンドンとその近隣のようなすは、次のようである。

It was by this time about nine in the morning, and the first fog of the season. A great chocolate-coloured pall lowered over heaven, but the wind was continually changing and routing these embattled vapours; so that as the cab crawled from street to street, Mr. Utterson beheld a marvelous number of degrees and hues of twilight; for here it would be dark like the back-end of evening; and there would be a glow of a rich, lurid brown, like the light of some strange conflagration; and here, for a moment, the fog would be quite broken up, and a haggard shaft of daylight would glance in between the swirling wreaths. The dismal quarter of Soho seen under these changing glimpses, with its muddy ways, and slatternly passengers, and its lamps, which had never been extinguished or had been kindled afresh to combat this mournful reinvasion of darkness, seemed, in the lawyer's eyes, like a district of some city in a nightmare. (23)

あたかも「ハイド氏（Mr Hyde）」の姿を探す、「シーク氏（Mr Seek）」と化したアタスン氏からその姿を「隠す（hide）」かのように、「この季節最初

の霧」が立ちこめ、「チョコレート色のとばり」が空から垂れ下がり、風がたえず「密集した蒸気を」吹き散らしながら、街は刻々とその姿を変えていく。彼の住むソーホーの街は、「ぬかるんだ道、だらしない通行人、いつも消されることのない街灯がともされ」、まるで「悪夢のなかのどこかの市街の一角」のように、アタスン氏たちには思える。ここで、「いつも消されることのない、もしくは陰気な暗闇が押しよせてくるのを防ぎとめるために新しくともされた街灯」と表現されている「街灯」とは、この頃まで主流であったほの暗いガス燈であると推測される。というのも、1888年10月1日の *The Star* 誌の記事によれば、当時イースト・エンドで頻発する犯罪を防ぐための電気街灯設置の要求が高まったとあり、その設置を急がなければ犯罪の巣窟イースト・エンドが、大英帝国の根幹を揺すぶりかねないとの懸念が、その記事には表明されている。もちろん、その電気街灯設置はウエスト・エンドが優先され、イースト・エンドに設置されるのは切り裂きジャック事件以降のことだとあるので (Dryden 90)、この小説が書かれた当時のイースト・エンドの暗闇がどのようなものであったかは想像に難くない。

ハイド氏の住まうすすけた通りでは、俗悪な居酒屋や、下等なフランス料理店、三文雑誌や惣菜料理を売る店などが並び、ぼろをまとった子どもたちや、さまざまな国籍の大勢の女たちが、霧の晴れ間から見えるように、ここには貧困と異国性の徴が刻印されている。いかにも貧弱な体つきで、「人をぞっとさせるような形相」をした、小柄でいびつな印象を与える、他者性の刻印が際立つハイド氏は、そのため、まさにこのソーホー帯の雰囲気にもふさわしい住人のように見える。彼の家の召使の老婆も、ジキル博士の召使頭である主人思いの Mr Poole と全く対照的で、「悪意のみえる顔立ち」をし、主人の悪事が発覚したらしいことに喜びを隠さない。そのためアタスン氏は、その住まいに置かれているすべての趣味のいい贅沢な家具や銀食器やテーブルクロスなどの調度品、とりわけ壁にかかっている絵は、ハイド氏にはふさわしくないと、「美術鑑定の日利きであるジキル博士からの贈り物」(24)

だと考えるのだが、意外にもそうした趣味のいい調度品は、スティーヴンソンが自身の書簡の中で言及しているように、ハイド氏自身が買い求めたものに他ならない。³ このことから明らかなように、ジキル博士とハイド氏の両者に付随する記号的符牒は、階級的な側面だけに限定しても、前者を富裕な西の属性、後者を貧困な東の属性とする固定的な二分法に還元することはできないのだ。こうした階級の問題とロンドンのトポロジーとの関係や、性に関する問題との関係については、次節においてさらに、当時の退化思想や犯罪学をめぐる言説とからめて吟味していくことにしたい。

3 犯罪と階級をめぐる退化の言説

『ジキル博士とハイド氏』が当時のヴィクトリア朝の人々に脅威を与えたのは、ひとりの人物のなかに2つの人格が存在し、主人公の中に内在する善と悪の各々の人格に、相互自在に往き来できるという事実ではないだろう。彼らを震撼させたのはむしろ、両者の連続性もしくは区分不可能性であり、2つの人格が互いに争った結果、悪であるハイド氏の人格にもう一方の人格が乗っ取られてしまった結果、薬品の力だけでは制御不能になってしまうという事実であるに違いない。さらには、ソーホーで眠っているべきハイド氏が、ウエスト・エンドの邸の寝室で目覚めるという、その領域侵犯性であるだろう。

当初、著名な医学博士の肉体をぬぎ棄て、厚い外套でも着るようにハイド氏の若々しく活力にあふれた小柄の肉体と醜悪な容貌を身につけ、誰にも知られることなく悪を行えることに狂喜した博士だったが、その博士の姿で眠っている間にハイド氏に乗っ取られてしまったことに気づく。

I was still so engaged when, in one of my more wakeful moments, my eye fell upon my hand. Now the hand of Henry Jekyll (as you have often remarked) was professional in shape and size: it was large, firm, white and comely. But

the hand which I now saw, clearly enough, in the yellow light of a mid-London morning, lying half shut on the bed clothes, was lean, corded, knuckly, of a dusky pallor and thickly shaded with a smart growth of hair. It was the hand of Edward Hyde. (61)

ジキル博士として眠りについたはずだったが、ベッドの上に博士の「形も大きさも職業にふさわしい」「大きくてがっしりした、白くて美しい手」ではなく、ハイド氏の「やせて、筋張った、節が高く、青黒くきちんとはえた毛でもじゃもじゃとおおわれた手」を発見し、目覚めた場所もソーホーの一角ではなく、「ロンドン中央部」の博士の邸のベッドの上であることに気づいて、彼は驚愕するのである。

おぞましく醜悪で猿のように敏捷な、「不具で頹廢のあと」が著しい発育不全の小男で、もじゃもじゃの毛が生えた手を持つ、「洞窟人のような (troglodytic)」（16）といったハイド氏の容貌には、後期ヴィクトリア朝に流行した、ダーウィンの進化論から派生した退化思想の影響を見出すことができるだろう。社会の貧困や多発する犯罪の問題に頭を悩ませていた後期ヴィクトリア朝の人々の想像力は、当時流布していた退化思想をもとに、善と悪、正常と異常、健康と病気といった二つの範疇を明確に区分し、退化という逸脱の徴を排除しようと務める。Bram Stoker (1847-1912) の *Dracula* (1897) や、H. G. Wells (1866-1946) の *The Island of Dr Moreau* (1896) は、ヒトが野獣へと退行してしまうことに対する彼らの恐怖と想像力によって生み出された小説だといえる。しかしながら『ジキル博士とハイド氏』は、その境界線が実はあいまいであることを露呈する。高名な慈善家がいつのまにか野獣のごとき犯罪者に姿を変え、ヒトの内に獣が潜んでいることを暴いてみせることにより、未開の国々を統治する優良な白人種によって築かれた大英帝国という概念は、根底から揺すぶられてしまうのである。というのも、Gillian Beer が指摘するように、進化論によれば、ヒトと類人猿との間には、はるか昔に両者をつないでいたはずの「失われた輪」が存在すると考えられ

たのだが、この小説においては、両者をつなぐはずの怪物（畸形）的な存在は、もはや「過去として、神話として、幻想として、安全に遠ざけておくことのできるものではない」という事実が露わにされるのであるから。つまりそれは、「抹殺され絶滅したものではなく、まさしく抑圧されたものの回帰」（Beer 142）に他ならないのである。

ハイド氏が帯びている上記のような先祖返りの退化の徴については、さらに、この時代に退化思想と手をたずさえて流布していた、Cesare Lombrosoの「犯罪性退化（criminal degeneracy）」とも関連させ、階級の問題と絡めて論じておこなってはならない。⁴ イタリアで出版されたロンブローゾの著『犯罪人論』（1876）は、その後1891年にイギリスで翻訳が出されたこともあり、後期ヴィクトリア朝には広く浸透していた書物である。その議論では、犯罪者は特有の骨格や容貌をしているために、彼らを早期に発見して隔離し、特別な教育を施せば、犯罪を未然に防ぐことができるという。容貌に関するその観察によれば、犯罪者は「際立った耳、豊かな髪、まばらなひげ、巨大な鼻腔と下あご、四角く突き出したあご先、広い頬骨」などの特徴を持って生まれるのだが、「それらは進化論の、復帰突然変異や先祖返りという範疇を通して理解しうるような遺伝的特性で、生まれながらの犯罪者は生来的に、はるかかなたの先祖の原始的な型への先祖返りであった」（Greenslade 92）と信じられていたのである。つまり猿を想起させるハイド氏の容貌には、こうした「犯罪性退化」の思想が反映されていることがはっきりと窺えるのだ。⁵ この犯罪性退化思想を基にして、ロンドンにおいてはとりわけ、犯罪者は退化の符牒を帯びると同時に、貧困およびイースト・エンドとも結びつけられる。その結果、イースト・エンドは貧困で犯罪の巣窟であるとされ、ウエスト・エンドは裕福で文化的で安全であるとされた。しかしながら先にみたように、この小説においては、彼の25万ポンドの財産相続人で「ジキル博士のお気に入り（Henry Jekyll's favourite）」のハイド氏は、ソーホーの住人でありながら、その趣味はジキル博士と同様に豊かで洗練されたものであ

り、彼は決してイースト・エンドの記号的属性に還元しえないことは、先にみた通りである。Stephen Arata が指摘するように、「彼の衝動性や野蛮性、激しい気性と外見はハイドを下層階級で先祖返りのようだと言いつける一方、彼の悪行は明らかに金持ちの紳士のものである」(Arata 35)。当時のこうした言説に拠って、主人公が二つの領域と二つの階級にまたがる属性を備えているとみなしうることを考慮すれば、ハイド氏の家の調度品は彼自身が買い求めたもののだとして、スティーヴンソンがこの点に強くこだわったのも、十分に得心のいくことだと言えよう。

4 ロンドンの喧騒とクローゼットの秘密

『ジキル博士とハイド氏』においては、とにかくジキル博士の二重性にのみ注目が寄せられるが、その友人で「やせて、のっほで、生気がなく、陰鬱な」、しかしながら時には「あふれるばかりの人情味が眼にかがやく」アタスン氏自身の二重性も、この小説の理解のためにはきわめて重要である。さらにまた、アタスン氏が語る物語の怪しい雰囲気は、ロンドンの夜の闇によって一層強められているのだが、その効果は、物語の視点人物であるアタスン氏自身の空想的語りにも拠るところが大きいという事実も忘れてはならない。彼は、芝居好きだが20年間劇場には足を踏み入れず、自身に対しては身を厳しく律しているが、「他人に対しては寛大で、血気にはやって不始末をしでかしてもすると、うらやましいとばかりに眼をみはっていることもあり」、人が窮地に陥っている場合には非難するどころか助けてやるが多く、「墮落してゆく人々と最後まで立派につきあってやる」(5) というきわめて矛盾に満ちた人物である。その彼は、主要な女性登場人物がまったく登場しないこの小説において、⁶ ジキル博士と同じように、その交際相手はほぼ名士たる男性の友人たちに限られている。日曜日にはエンフィールド氏との散歩を何よりも楽しみにしていて毎週それを欠かすことがないが、「この二人が互いの中に何を見いだすのか、多くの人にとっては謎」である。またこのアタ

スン氏は、職業柄人の秘密は決して漏らさない人物だが、彼の主任書記の Mr Guest とはうちとけて夕飯をともにすることもあり、その際にはゲスト氏に何でもつつみ隠さず話をするという。このように、自己抑制的でありながら「カインの異端思想に好意を持つ」というアタスン氏は、それゆえジキル博士の「暗い過去」と深い関わりを持つと想定されるハイド氏との関係に妄想をめぐらし、その結びつきに強く惹きつけられずにはいられない。

正直な人物が、「若気の道楽を種に、法外な金を搾り取られている」(9)、つまり「ゆすり」にあっているのだと考えるアタスン氏は、博士の身を案じながら眠れない夜をすごし、想像力は「虜にされ」、エンフィールド氏が目撃したというハイド氏が子どもを踏み倒していく場面を、「一卷の幻灯画のように」心の中に映し出す。それゆえ、その語りの中で、「彼は夜の都会に一面に街灯がかがやき、ひとりの男が足早に歩いているのに気づくだろう (He would be aware of the great field of lamps of a nocturnal city; then of the figure of a man walking swiftly)」(13) とある箇所、「彼」とあるのは、果たしてエンフィールド氏なのか、それとも彼に同化してしまっているアタスン氏自身なのか判別することはできない。そして、空想の中だけでなく実際の場面でも、そのエンフィールド氏の占めていた位置を自身で占めるべく、アタスン氏は夜ごとの見張りを続け、ついにその苦勞が報われる時がくる。

And at last his patience was rewarded. It was a fine dry night; frost in the air; the streets as clean as a ballroom floor; the lamps, unshaken by any wind, drawing a regular pattern of light and shadow. By ten o'clock, when the shops were closed, the bystreet was very solitary and, in spite of the low growl of London from all round, very silent. Small sounds carried far; domestic sounds out of the houses were clearly audible on either side of the roadway; and the rumour of the approach of any passenger preceded him by a long time. Mr Utterson had been some minutes at his post, when he was aware of an odd, light footstep drawing near. In the course of his nightly patrols, he had long grown accustomed to the quaint effect with which the footfalls of a single

person, while he is still a great way off, suddenly spring our distinct from the vast hum and clatter of the city....

Mr Utterson stepped out and touched him on the shoulder as he passed.
 “Mr Hyde, I think?” (14)

それはまるで、彼がすでに空想の中で思い描いていた場面の再現のようでもあった。このとき街は、「四方からつたわるロンドンの低い、唸るようなどよめき」を発する身体を持った怪物と化す。夜ごとのパトロールのせいでも、人の足音が遠くにあっても、「街中の大きく唸るような騒々しいざわめき」の中から飛び出してくるように響く「奇妙な効果」に慣れていた彼は、「強く迷信めいた予感」を抱いてハイド氏の足音を待ち受け、外見からハイド氏に間違いないと見て、声をかける。つまりアタスン氏にとって、ロンドンの街は、すでに幻想とも現実ともつかない、唸り声を発する巨人のような存在となっているのである。

さらに興味深いのは、彼の語りにおいて、ロンドンの霧と喧騒は街角にとどまることなく、次第にウエスト・エンドの彼らの住まいにまで侵食してくるということである。カルー殺人事件の直後、ゲスト氏を招いた晩餐の後、ジキル博士から渡されたハイド氏の手紙をゲスト氏に見せる際の彼の邸の部屋の中の描写では、部屋の中はかろうじて外の喧騒から守られているものの、その気配はすぐ近くまで迫っているようにみえる。

The fog still slept on the wing above the drowned city, where the lamps glimmered like carbuncles; and through the muffle and smother of these fallen clouds, the procession of the town's life was still rolling in through the great arteries with a sound as of a mighty wind. (28)

「霧がとっぷりと湿気に濡れそぼった街」の中で、「この街の人々の生活を織りなす往来が、すさまじい強風のように響きをあげて、大通りにとどろいて

いた」が、その街の喧騒は、邸の中でもすぐ間近に聞こえ、そこまで迫っている。アタスン氏が探し求める、ジキル博士と彼の「お気に入り」のハイド氏との関係を解くカギは、イースト・エンドにあるハイド氏の住居ではなく、博士の邸の実験室にある「キャビネット」の中にあった。その危険な秘密の謎は、快適で安全なはずのウエスト・エンドの邸の一番奥に隠されていたのである。アタスン氏は当初、ハイド氏をジキル博士の同性愛の相手で、その不品行をネタに博士がゆすられているのだと考えていた。その夢のなかでは、ジキル博士は深夜、合鍵で忍び込んだハイド氏によってベッドのカーテンが引かれると、「起き上がってその命令に従わなければならない」(13)のだと想像し、「あんなやつが盗人のようにハリーの枕もとに忍びこむと思うとぞっとする」(18)などと考えて悶々とするなど、アタスン氏は次第に「レイプ幻想」(Showalter 110)を抱くようになっていた。そしてこうした幻想は、彼の友人たちにも共有されていたように思える。たとえば、アタスン氏がジキル博士のことを心配して Dr Lanyon を訪ねた折には、「ジキルの一番古い友だちといえば、きみとほくだろう」とアタスン氏が語った際の、ラニオン博士の、「友だちも、おたがいもっと若いといいんだがね」(12)という返答などからも推測可能だろう。その時のアタスンの口調も、ハイド氏を「彼(ジキル博士)の秘蔵っ子(a protégé of his)」と呼ぶなど、会話の流れにふさわしいものであった。このように、ショウォルタの指摘を待つまでもなく、薬品による化学実験の結果としての変身物語は、「世紀末の同性愛をめぐるパニックの寓話」として読むことができることもまた、忘れてはならない。⁷さらにそれが、常にロンドンの湿った霧と街の喧騒と結びつけられていることも。アタスン氏が召使頭の Poole と一緒に博士の実験室に無理矢理踏み込んでいく直前にも、やはり「ロンドンの街は、あたりいちめんじに厳かにうなり声を立てていた」(43)。

ジキル博士の謎は彼のキャビネットの中に隠されていたわけだが、この「キャビネット」には、「隠していたこと(同性愛)を公にする(come out

of the closet)」という表現にある「クローゼット」が含意されているのは言うまでもないだろう。ラニオン博士は、ジキル博士の指示に従い、ジキル博士のもとからそれを持ち帰りハイド氏に手渡す。このように、男たちの重要な秘密は、それがキャビネットの中の薬品であれ手紙であれ、そしてまた遺言状であれ、男から男へと順々に手渡されていく。ジキル博士の遺言状は、当初ハイド氏宛てであったものが、開封された時にはアタスン氏宛てに変更されていた。ハイド氏が書いたとされるジキル博士直筆の手紙は、アタスン氏の手へ渡った後ゲスト氏に示され、カー氏が殺された際に手にしていた手紙は、アタスン氏宛のものだった。このように男から男へと受け渡される手紙（=秘密=愛）によって織り成される『ジキル博士とハイド氏』は、みずからのセクシュアリティを隠していた当時の J. A. Symonds (1840-93) や Oscar Wilde (1854-1900) などの作家たちがそうであったように、確かに「男同士のコミュニティーの誓約 (a signing to the male community)」(Showalter 115) の物語とも読むことができるのである。また、ロンドンの霧の背後で、男たちがさまざまな形の戦慄的な愛をかわしあうところに、この小説の魅力が潜んでいるのだとも言えるだろう。

5 書き直される物語

これまで多くの作家たちの想像力を刺激してきた『ジキル博士とハイド氏』だが、この小説はさまざまに書き換えられ、映画化もされてきている。そうしたなかで、スティーヴンスンの小説の特徴をなしている、男性同士のコミュニティーとは対照的な、女性同士のコミュニティーを強調しているエマ・テナントの『ロンドンのふたりの女』(1989) をここで取り上げることにしたい。というのも、この小説をスティーヴンスンの小説と対比することで、これまで論じてきた彼の小説の特質、特に都市の表象の独自性が、再確認できると考えるからである。

現代版切り裂き魔の事件を取り入れて、スティーヴンスンの小説を書き直

したテナントの小説は、ロンドンという都市が女性たちにとっていかに脅威であったかを伝えてくれる。時代は1988年、実在したノッティング・ヒル強姦魔の犯罪におびえる女性たちの物語に架空の分身物語が織り成されているこの小説は、現代のロンドンを背景としながら、ところどころにヴィクトリア朝のなごりがわずかながら残っている。また物語の枠組みも、副題から推察されるように、スティーヴンスンの小説を大いに模している。美しいギャラリーの支配人として豊かな暮らしをしている Ms Eliza Jekyll と、離婚して子どもの世話で憔悴し生活保護を受けながら生きる醜い Mrs Hyde という、ひとりの人物の全く対照的な特性とその生活を描くこの小説で、ふたりは共同庭園を介して隣接しあって住んでいる。ほっそりと美しいミズ・ジキルは、実はトランクライザーの作用によって変身した、ずんぐりとして醜悪なミセス・ハイドのもうひとつの姿であり、両者の住居に関する、正面入り口は離れているように見えながら、互いが互いの庭から往き来可能であるという設定は、ジキル博士の邸の正面と裏口が中であつながつているというスティーヴンスンの巧みな工夫を、より単純化したものである。

ふたつの小説の違いで注目すべきなのは、テナントの小説では、2つの人格は明確に区分できるということで、テナントの描写は、善と悪を兼ね備えたジキル博士の内面の複雑さを描くスティーヴンスンの筆致にはるかに及ばない。むしろテナントは、イメージによってその二重人格性を呈示することに力点を置いているようで、小説終盤で Grace Poole が目撃する、ひとりの人物の顔に浮かぶミズ・ジキルとミセス・ハイドの2つの相貌というイメージは、印象的である：「あのいくつものコラージュのために切り刻んでは貼り付けたミセス・ハイドの顔が、一瞬ではあったがまぎれもなくイライザの顔に刻まれていた」(108)。この顔の目撃者の名前が、Jane Eyre の召使と同姓同名になっているのも、分身のテーマを強調する工夫であると思われる。⁸ 両者の間の大きな相違点は、物語の主要な舞台がノッティング・ヒルに限られているテナントの小説においては、スティーヴンスンの小説でみられるロ

ンドンの東と西とのコントラスト、ロンドンの霧と夜の街灯がかもし出す恐怖、街の喧騒や反響音が生む怪物のようなロンドンの魅惑などの描写がみられないということで、それだから一層、ステイーヴンソンの小説のロンドン描写がいかにか多面性を備えているかを、改めて再認識させてくれるのである。

テナントの小説の特質はむしろ、現代の都市に住む女性が置かれている状況の明と暗に焦点を当て、男性にとって都合のよい存在であることを要求され、追い込まれてしまう女性たちの苦悩や怒りを描きだすことにあるといえよう。ここでは、女性版ジキルとハイドを取り巻く人物たちがほとんど女性であり、彼女たちの社会的立場が、医者や弁護士のような職業人から、芸術家や主婦など、さまざまに位置づけられているので、ミセス・ハイドの殺人事件に対する反応もまちまちであり、それがこの小説に視点の広がりを与えている。二重人格者ミセス・ハイドの強姦魔殺人事件の全貌を明らかにするため、ビデオによる撮影、日記、手紙、留守番電話のメッセージなどを駆使するという方法を取っているのも、女性たちの多様な声を響かせる役割を果たしている。そしてテナントの小説技法に関するこうした試みは、小説の冒頭近くの場面における、画家 Mara の展覧会に飾られた絵に関する解説とも呼応しあっているだろう。その絵は、コラージュによって構成されている女性の顔を示しているが、ひとつの顔でありながら、様々な相貌から成り立っているのである。

Possibly some of that vulnerability accounts for her pictures. They have a quality that is mesmerizing because it is, literally, indescribable: no single woman has those cheeks, that Cyclops eye, the turned-up nose that adds a note of macabre humour to the Face of Revenge. And the unknown woman is herself spread over multi-panels so that a portion of her brooding, bruised face looks out with sudden ferocity from a corner of the gallery— or, again, a curtain of gold-silk hair with a gash of red torn flesh for a mouth looms from a suspended raft. (Tenant 14–15)

このように、どの女のものともつかない顔の部分の寄せ集めからなる、「ひとりの女のものではない」「誰ともしれない女の顔」は、一人の女性の中の二重人格性というテーマに留まることなく、この小説を、多くの女性たちの多面性を描く物語とすることに貢献しているだろう。しかしながら、こうした女性のコミュニティーの描き方は、スティーヴンスンの小説での同性愛をめぐる、はっきりと公言されることのないクィアで謎めいた雰囲気描写とは全く対照的であり、この点はミズ・ジキルの画廊でのパーティーにおける、同性愛活動家たちの公然たる出席やその発言などに、明確に見ることができる。

以上のように、テナントの小説は、ジェンダーの問題の描き方において新味が加えられているものの、スティーヴンスンの小説のように都市の魅力を描くことに焦点が置かれているわけではない。この翻案小説と対比してみれば、『ジキル博士とハイド氏』という小説が、とりわけ音の効果を通して、いかに19世紀末の喧騒的な都市ロンドンの光と影や、魅惑と恐怖を多面的かつ立体的に描きえているかが、よく理解できるのである。

注

- 1 テクストの注にもあるように、「言葉にできないような」、という「畸形」の属性は、ゴシック小説や空想小説の主要な特性で、スティーヴンスンは、「神秘的で、恐ろしい、非人間的な属性を強めるために、この修辭的戦略を用いている」(164)といえる。
- 2 Dryden は、「ロンドンの空間的地形が、近代のゴシック作品における二重性にとって重要である」ことを指摘している。p. 67を参照のこと。
- 3 この点については、スティーヴンスンが F. W. H. Myers に宛てた1886年3月1日付けの手紙 *The Letters of Robert Louis Stevenson*, III, 326 を参照のこと。
- 4 「犯罪性退化 (criminal degeneracy)」に関する議論については、Greenslade の *Degeneration, Culture and the Novel* の第5章 (88-119) に詳しい。
- 5 顔色が悪く、猿のような容姿で、身体がいびつという描写には、当時恐れられていた梅毒症のイメージも反映されており、アタスは、ジキル博士がハイド氏から「患者を苦しめ変形させてしまうような例の病氣」(41)をうつされたために、それを治す薬を求めているのではないかと、とも想像する。
- 6 この点については、Heath の興味深い論文の p. 28を参照。
- 7 この議論については、Showalter の *Sexual Anarchy* の第6章に詳しい。

- 8 事件を目撃する人物が、スティーヴンソンにおいては男性の召使 Mr Poole であったのが、ここでは *Jane Eyre* に登場する召使と同姓同名になっているのは、Charlotte Brontë の小説において、Bertha がジェーンの分身であるとする Gilbert と Gubar の議論が意識されているからに違いない。Gilbert & Gubar の第10章を参照。

Works Cited

- Ackroyd, Peter. *London: The Biography*. London: Vintage Books, 2001.
- Arata, Stephen. *Fictions of Loss in the Victorian fin de siècle*. Cambridge and New York: Cambridge UP, 1996.
- Beer, Gillian. *Open Fields: Science in Cultural Encounter*. Oxford and New York: Oxford UP, 1996.
- Colvin, Sidney (ed.). *The Letters of Robert Louis Stevenson*. 4 vols. New York: Charles Scribner's Sons, 1911.
- Dryden, Linda. *The Modern Gothic and Literary Doubles: Stevenson, Wilde and Wells*. London and New York: Palgrave Macmillan, 2003.
- Gilbert, Sandra M. and Susan Gubar. *The Madwoman in the Attic: The Woman Writer and the Nineteenth-Century Literary Imagination*. New Haven: Yale UP, 1979.
- Greenslade, William. *Degeneration, Culture and the Novel 1889–1940*. Cambridge and New York: Cambridge UP, 1994.
- Heath, Stephen. "Psychopathia sexualis: Stephenson's *Strange Case*," *Critical Quarterly* 28 (1986).
- Showalter, Elaine. *Sexual Anarchy: Gender and Culture at the fin de siècle*. New York: Penguin Books, 1991.
- Stevenson, Robert Louis. *The Strange Case of Dr Jekyll and Mr Hyde*. London and New York: Penguin Books, 2002.
- Tennant, Emma. *Two Women of London: The Strange Case of Ms Jekyll and Mrs Hyde*. London and Boston: Faber and Faber, 1989.
- Walkowitz, Judith R. *City of Dreadful Delight: Narratives of Sexual Danger in Late-Victorian London*. Chicago: The U of Chicago P, 1992.